

## 生活保護世帯の若者たちの学校タイプと進路選択

三浦 芳恵

キーワード：子どもの貧困／進路選択／キャリア教育

### 1. 問題の所在

貧困状態に置かれた若者たちは、学校教育から早期に排除されやすく、学校卒業後の進路についても不利を経験しやすいことが明らかにされてきた。学校経由の就職が機能不全となつてから、学校の進路指導を介さずに不安定雇用に入れ込む若者たちの存在が指摘されてきた(乾 2006)。高卒後に安定した雇用に就くことが難しくなっている一方で、大学進学率が高まるが、在学費用が負担できない家庭環境にある子どもたちが進学状況の変化に取り残されている(白川 2017)。また、生活保護世帯から高校卒業後に進学する者は、世帯分離扱いとなり保護費が減額されてしまうため、進学者たちが学費だけではなく生活費の捻出に苦勞をしながら学校生活を送っていることも指摘されている(桜井 2018)。

貧困状態に置かれた高校生の進路については、高卒で安定した仕事に就くことができず、進学することも困難であることが問題視されてきた。しかし、彼ら彼女ら自身が、必ずしも正社員就職や四年制大学進学を望ましいと考えて進路選択をしているとは限らない。たとえば、植上(2011)は、専門学校進学者に独自の進学要求があることを明らかにしており、経済・学力的な事情において大学進学を断念した者たちが、身近な職業世界や趣味の世界にかんすることを学びたいという要求をもって、積極的に専門学校に進学する過程を描いた。貧困状態に置かれた生徒たちの実態を理解する上でも、彼ら彼女らの状況に即して求められる進路形成のあり方(進路要求)を明らかにしていく必要があるだろう。

では、貧困状態に置かれた高校生は、どのような状況で、いかなる進路要求を持っているのだろうか。林は、大学進学した生活保護世帯の高校生たちが、学校

や勉強中心の生活を送る中で、大学進学を考え始めたことと指摘している。そして、このような高校生活を送った背景には、全日制高校に進学していたことが影響していたのではないかと示唆している(林 2016)。また、経済的な余裕がない者であっても、普通科である場合には一定の職業領域に水路づけられることはないため、高校卒業後に改めて自分の望む職業に適した学校への進学が目指されていることも指摘されている(杉田 2015)。これまで、高校の課程(全日・定時・通信制等)や学科(普通・専門学科等)が高校生たちの進路に影響をもたらすことが示されてきたが、課程や学科ごとに高校生活や進路選択の経験を分析することは行われていない。そこで、本論文では貧困状態に置かれた高校生たちの学校生活とそこで生まれる進路要求について、課程や学科ごとに描いていきたい。

学校生活だけではなく、保護者の状況や家庭生活が、子どもたちの学業達成や進路形成に大きな影響を与えることも論じられている。生活保護世帯のシングルマザーは、離婚後に子どもの世話をしながら長時間労働をするために、心身の不調を経験していることが多く(阿部 2008)、子どもの教育や進路に積極的に関わる余裕が到底持てないことも明らかになっている。不調を抱えた保護者の代わりに、子どもたちが家庭の中で重要な役割を担うことが、進路形成に不利な影響をもたらしていることも指摘されている(林 2016)。もう一方で、生活困難層の保護者が独自の子育て意識や教育期待を持っていることも論じられている。たとえば、親たちが子どもを長期的に養育できないことを見越して、「自分のことは自分でできるように」という方針で家庭教育を行っており、以前よりも大学進学志向が弱まり「手に職」が望まれる傾向にあること(盛満 2014)が明らかとなっている。厳しい状況に置かれた保護者たちの期待や働きかけについては、実際の子どもたちの

進路と結びつけて論じられることはなかった。本論文では、保護者が子どもたちの進路選択にどのような期待をもって、どのように介入したのかについても子どもの進路選択経験の中で明らかにしていきたい。

以上から、本論文では生活保護世帯の高校生およびその保護者へのインタビュー調査をもとに、学校タイプごとに学校生活・進路要求・保護者の期待および働きかけの3点を含んだライフストーリーを作成し、進路選択の経験を分析していきたい。

## 2. 調査方法と対象

本論文で用いるのは「子ども・若者の貧困対策諸施策の効果と社会的影響に関する評価研究」(日本学術振興会「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業(実社会対応プログラム)」平成27～30年度 研究代表者 阿部彩)の一環として行われたインタビュー調査である。2016年8月～9月に予備調査を実施し、2017年1月～10月に本調査を実施した。

調査協力者は、2010～2015年に中学生として首都圏郊外にあるX市の学習支援事業(以下勉強会)に参加した利用者21名、およびその保護者17名である。利用者の年齢は、インタビュー当時16～21歳であった。X市の勉強会は、生活保護世帯の子どもたちに向けたものであり、協力者はすべて生活保護受給世帯であったが、1世帯のみ調査時に生活保護が廃止となっていた。現在も生活保護を受給している協力者へのコンタクトは、ケースワーカーを通じて了解が得られた世帯について連絡先の提供を受け、調査グループより

直接コンタクトを取った。生活保護が廃止となっている世帯で継続して勉強会主催NPOとかかわりがある者については、NPOを通じて本人および保護者への協力依頼を行った。

インタビューの内容は、現在の状況やこれまでの家庭・学校での経験、学習支援事業に関することなどである。インタビューは当事者と保護者別々に行い、基本的に対象者の自宅付近の公共会議室を利用し、おおむね1時間程度行った。外国生まれで日本語に自信がない保護者に対しては、母国語あるいは通訳を通してインタビューを行った。インタビューにあたっては、調査趣旨やデータの取り扱い、参加者の権利についての説明を冒頭に行い、了解が得られた場合は録音を行った。インタビューはあらかじめ項目を用意した半構造化形式であったが、対象者の話しやすさやその場の文脈を優先したことから、調査項目以外の質問が追加されることや、調査項目の一部を省略したこともあった。なお、プライバシーへの配慮から対象者の名前や地域名など個人の特定につながる部分はすべて仮名とする。

今回は、高校進学者の中でもより進路選択の経験が本格的となっている3,4年以上を分析の対象とする。高校3,4年以上の者たちの学校タイプと高校卒業後の進路については表1のとおりである。紙幅の都合により、各高校タイプと進路類型について人数が多い場合は代表的なケースを取り上げて分析する。次節では、全日制高校専門学科、全日制高校普通科、定時・通信制高校普通科に分けて、進路選択の経験を検討していく。

表1 高校タイプと卒業後の進路(高校3,4年以上)

仮名	性別	年齢	インタビュー時の学年	高校タイプ	高校卒業後の進路
高井 涼介	男	17	高3	公立全日制高校工業科	正社員就職志望
加納 大吾	男	18	高3	私立専修学校商業系学科	正社員就職内定
田口 朋美	女	18	短大1	公立全日制高校普通科	短大進学
野田 美奈	女	18	高3	公立全日制高校普通科	短大進学決定
松崎 麻美	女	18	高3	公立全日制高校普通科	専門進学決定
前野 由希子	女	17	高3	私立全日制高校普通科	専門進学決定
五十嵐 栄子	女	18	高3	公立全日制高校普通科	専門進学決定
三島 絵里	女	20	—	公立全日制高校普通科	専門進学
岡崎 大祐	男	20	—	公立全日制高校普通科	未定/療養
金森 義孝	男	18	高3	私立全日制高校普通科	未定
杉本 彩香	女	19	5年目	公立通信制高校普通科	未定
倉田 藍	女	19	4年目	公立定時制高校普通科(単位制)	未定
佐々木 裕樹	男	19	短大1	私立通信制高校普通科	短大進学

※学年制をとっていない高校に通っている者については、学年の欄に入学してからの経過年数を記入した。



### 3. 全日制高校専門学科の者たち

高校専門学科に進学した者は、全体で2名のみだった。ここで扱うケースは、加納大吾さん（インタビュー時は私立専修学校商業系学科3年）、高井涼介さん（インタビュー時は公立工業高校3年）のものである。

#### 3-1. 加納大吾さんのケース

加納さんの両親は加納さんが3歳のときに離婚しており、離婚した後は本人・母親(60代)・弟(2歳下)で暮らしていた。職人である父親は再婚して別の家庭をもっており、近くに住んでいた。加納さんや弟とたまに会って話すことがあるが、経済的な支援はなかった。

加納さんは小学校時代から「勉強めんどくさい」と感じていたことから、学校に行くのが嫌だった。一方で母親は公立高校に入学することを強く願っており、費用の負担が少ない塾に通わせたこともあった。しかし、高校受験時には、第一志望の公立高校に不合格となって、私立専修学校の商業系学科に入学することとなった。入学時にかかる費用が40～50万円くらいとなったが、学費支援制度を申請できるのは秋以降であった。母親は親戚にお金を借りるために奔走した。

加納さんは、公立高校に入れず母親に経済的な負担をかけて申し訳ないと思っていたこともあって、入学当初は学年でも上位の成績を取っていた。しかし、しばらくたつと成績は下がっていった。

加納さんが高校卒業後の進路を考えたとき、当初は公務員の仕事に関心があった。加納さんが母親に相談したところ、公務員予備校の説明会に行くこととなった。しかし、入学金の詳細を知った母親は、入学金が用意できないため進学はできないと加納さんに話した。母親は、もし加納さんが公務員予備校に通っても、公務員採用試験に受かるかどうか分からないことが心配だった。母親は、進学を断念させるという目的で「じゃああなたは、その採用試験、もし落っこっちゃったらどうするの」と本人に尋ねるほかなかった。また、加納さんは進学したかったかという質問に対して、「(高卒で民間の)仕事(に就くの)は大変でしょうからね」と答えていた。

その後、進路志望を正社員就職に変更した。クラスの担任は「就職に強い」と言われていた。クラスで就職志望者は多く、求人は工場の仕事を中心だった。加納さんが父親と就職に関する話をしたとき、父親は工場の仕事について「辞めたら、次が難しい」という理

由であり良く思っておらず、ハローワークに行って別の仕事も探してみるようアドバイスをした。加納さんは、高校卒業後は一人暮らしをするよう母親に言われていたため、宿舎がついた仕事を意識して探していた。父親のアドバイスを受けて探した結果、不動産会社事務の正社員の仕事に内定した。宿舎もついており、卒業後は一人暮らしをするという。加納さんは当面の展望として、「ちゃんと仕事できるようになって、一人暮らしも始めるって、ちゃんと家事とかできるようにしなきゃなって」と語っていた。

#### 3-2. 高井涼介さんのケース

高井さんの家族は、父(50代後半)、母(父と同年齢)、高井さんの3人である。両親は経済的な事情から高校に行けずどちらも中卒だった。父親は病院の清掃のパート、母親は調理の仕事をしていた。高井さんが中学に入ったころ、母親が精神を病んで働けなくなったのと同時に、父親が当時の仕事を解雇されたために、生活保護を受給するようになった。

高井さんは、小学校時代から「夢がない」「夢を見ているより、現実を見ているほうが金になる」と考えており、将来は「サラリーマン」になろうとしていた。中学卒業後の進路については、普通科高校では学力的に難しいと言われていたこと、自身が「ものづくり」に興味があったことから工業高校進学を志望していた。進学にあたって、当時の担任がよく相談に乗ってくれ、受験先を決めてもらったという。

公立工業高校入学後は、宿題やレポートが多く、自宅でやる気は起きなかったが、宿題だけは休み時間にやることにしていた。レポート課題も多いが、クラスの仲間と連絡を取り合って協力し、なんとか期日通りに提出しているという。

高校3年で職場見学に行く際、第一志望にしていた自宅の近くにある交通関係の製造業の企業に行くことができた。行けるのは一人だけで、友人も同じ企業を志望していたが、高井さんのほうが成績がよかったために選ばれたという。今後については、第一志望の会社に推薦されるような成績を保つことができるかが気がかりだという。もし志望企業内定を得たら「ずっとそこでやっているんじゃないか」、「仕事とか、お金とか」が安定していればいいと考えていた。母親は高井さんに対して、「私も仕事を見つけて、来年の3月は、あなたの仕事と、お父さんの仕事と、お母さんの仕事で、3人で30万を超えるようにして生活保護から抜け

るようにしようね」と話しているという。

### 3-3. 分析

全日制高校専門学科の者たちは、正社員就職に強く水路づけられる環境にいた。加納さんの担任は周囲から就職指導が得意だと言われていたこと、高井さんの高校では学校推薦で就職先が決まっていたことから、二人が通う高校では学校経由の就職が機能していたことがうかがえる。ただし、高井さんは一貫して正社員就職を望んでいたのに対して、加納さんは公務員志望から正社員就職に進路変更をしていた。高井さんは、仕事・収入が安定していればよいと考え、就職先の企業で長く働き続けると見通しており、高卒での正社員就職を積極的に捉えていた。一方で、加納さんは商業系学科だったが、学校にきていた求人は工場のものが多かった。彼は当初公務員に関心を持っており、高卒で一般企業に就職することはそれほど積極的には考えていなかった。また、加納さんの父親は、初職が工場勤務だと、その後の転職が難しくなると心配しており、初職を長期的に続けられるという展望は持っていなかった。おそらく、加納さんにとって学歴が問われずにより安定した生活を送る手段として、公務員という進路が意識されていたのだろう。今回は紹介することができなかったが、本調査において公務員を志望していた者はほかにも2名いた。彼らもまた、高卒で公務員試験に合格することを通してより生活を安定させることを展望していた。

ただし、何の情報や支援もなく一人で公務員試験に向けた準備をするのは容易ではないため、公務員予備校への進学が検討された。母親は、私立専修学校進学時は入学金のために奔走したが、公務員予備校への進学については断念させようとする動きのほうが強かった。この背景には、予備校に行っても試験に合格できるかわからないと懸念していたことがあったのではないだろうか。最終的には正社員就職に進路を変更したが、就職準備に際して別居の父親はアドバイスを行い、積極的にかかわっていた。

全日制高校専門学科の者たちは、進学できる条件がないことを最初から意識していたか、途中で進学を断念していた。そして、学校経由の就職によって正社員就職をしていた。ただし、学科によっては高卒正社員就職に積極的になる者と、そうでない者がいた。このことについては、学校にきている求人がこれまで学んでいることと接続しているかどうかや、長期的に働け

る展望が持てるものだったかが影響していると考えられる。

## 4. 全日制高校普通科の者たち

全日制高校普通科に進学した者は、全体で8名、全員が高校3年生以上だった。正社員就職者と四年制大学進学者はなし、短大進学者が2名、専門学校進学者が4名、進路未定者が2名であった。ここで全員は扱えないため、各進路において代表的なケースとして、田口朋美さん（インタビュー時短大1年）、三島絵里さん（インタビュー時専門学校中退後非正規雇用）、前野由希子さん（インタビュー時高校3年）、金森義孝さん（インタビュー時高校3年）のケースを取り上げる。

### 4-1. 田口朋美さんのケース

田口さんの母親（インタビュー時に40代）は田口さんが生まれるころに離婚をしており、田口さんと兄（年齢不明）と姉（年齢不明）を引き取って、家族の勧めで生活保護を受給した。母親は田口さんに高校卒業後の進学は期待しておらず、「（娘は）人はいいので、かわいがってもらえるかなと思って、普通に就職を私は望みました、正直いうと」という。

小学生のときから教師との関係がよく、特に用事はなくとも校長室に行っていたという。勉強は好きではなかったが、高校には当然行くものと考えていた。受験校については、母親に近所の公立全日制高校普通科のA高校に行くよう言われていたが、教師から志望校の偏差値ランクを下げるように言われ、公立全日制高校普通科のB高校に変更し合格した。中学以前はクラスの中で最も成績が低いほうだったため、B高校には自分よりも成績が低い人が多くいることに驚いた。高校での勉強については「その学校だったら全然できるほう」であり、アルバイトもしていたが十分に両立できた。田口さんは高校時代のアルバイト代を家計に入れており、家族全員の収入が基準を上回ったため生活保護が廃止された。

高校入学後も教師との関係は良く、教師から四年制大学福祉系学科の指定校推薦の話をもち掛けられた。当時田口さんは勉強会で出会ったケースワーカーの仕事にあこがれて、社会福祉士の資格を取ってみたいかった。しかし、母親は「社会福祉士して何がしたいの」という反応だった。その後、保育士養成系のC短大の

学校説明会に参加したとき、C短大の担当者から社会福祉主事の任用資格が取れるという話を聞いて、C短大に興味を持ち始めた。母親や姉も保育関係の仕事をしていることもあり、保育分野にも関心を持ち始めた。保育系の短大に関心を持っているという話を母親にしたときは、「まあいいんじゃない」という反応だったという。四年制大学の指定校推薦を取りやめると教師に話したときは驚いた反応で「本当にそれでいいの?」と言われた。田口さんはC短大をAO入試で受験して合格したが、入学一時金の納付時期が早すぎて利用できる貸付金がなかった。入学一時金は母親が(田口さんの)祖母に借りて準備した。

#### 4-2. 前野由希子さんのケース

前野さんは、母親(30代)と弟(中学生)と3人で暮らしていた。母親は離婚をきっかけに生活保護を受給し始めた。離婚後、母親は生活保護を受給しながらマンションの管理会社で事務の仕事をしていたが、インタビュー時は体調を崩しており休職中だった。

前野さんは、私立全日制高校普通科のD高校に進学した。D高校を志望した理由は、母親が通っていた高校で、女子校であるためである。中学のときから、周囲の男子生徒や男性の体育教師に対する苦手意識があり、共学の高校に行くことには気が進まなかった。私立高校に通うことは経済的に非常に厳しかったが、母親が支援制度を調べていたところ、市の貸付金が利用できることがわかったため、それで進学費用を何とか準備した。貸付金の利用にあたっては、子ども本人と保護者の面接が必要だったため、母親も面接の準備をした。母親は生活保護を受けていることを周囲に言いたくなかったため、審査にあたっての資料づくりも手続きもすべて一人で行った。ケースワーカーに質問したことがあったが管轄外だと言われ、母親がインターネットや電話を用いて情報収集した。

中学の担任は進路指導の際に「選べる高校ないよ」と言っていたが、勉強会に参加してからは成績が上がり、D高校に合格することができた。しかし、入学後の前野さんは学校生活が全く楽しいと思えず、できれば転学をしたいという話もしていた。進学費用を準備した母親としては「結構私、苦労したんだけど」「いやほんと、勘弁してくれ」と感じていた。前野さんが2年になったとき、遅刻・欠席が目立つようになり、遅刻日数は年間100日程度になった。3年になって遅刻・欠席日数の多さに危機感を覚えた前野さんは、朝

にアルバイトを入れるようにして、学校に行けるように工夫した。その工夫の効果があって、3年以降の遅刻・欠席はかなり減った。

高校卒業後の進路については、ファッションに関することを学びたかったため、短大か専門学校のどちらに進学するか迷っていた。ケースワーカーからアルバイトで進学費用を貯められると聞いていたので、毎月のアルバイト代を入学一時金にあてるべく貯金しており、インタビュー時は20万円程度貯まっていた。一方で、担任は前野さんの成績が学校の中でも良い方なので四年制大学に進学するのはどうかと勧めていた。母親はふたたび進学支援に関する制度を調べ、オープンキャンパスにも同伴して進学費用や学校独自に利用可能な支援制度を詳細に調べた。母親はデザイン系の専門学校出身で、「(母親の仕事は)今はそれを生かすような仕事ではないんですけど。ただその気持ちもよく分かるので。やりたいことをやってくれという気持ちがある」という。

最終的には専門学校進学に決定したが、大学と比べて専門学校は受けられる支援の幅が狭いと母親は述べていた。

#### 4-3. 三島絵里さんのケース

三島さんは、母、姉、妹、弟(妹は二歳下、それ以外は年齢不明)と暮らしている。三島さんが中学生のときに両親が離婚したことで、生活保護受給に至っていた。

三島さんは小学校時代から学校の勉強が得意ではなく、小学1～2年では心配した教師が個別に指導をしていたが、3年以降は担任が変わって個別の指導が受けられなくなった。中学のときは塾に行ったが周りのペースについていけずに辞めた。その後勉強会に参加したが、そこでは教え方がわかりやすく、友人と楽しく過ごすことができた。高校受験をした際に、前期では第一志望の公立定時制高校に不合格となった。その後、担任教師のアドバイスもあって後期で公立全日制高校普通科のE高校を受験して合格した。E高校の入試は、学力試験を課さない面接のみの形態だった。

E高校入学後は、仲の良い友人ができ、授業についても中学以前の勉強を丁寧に教えられたことで、勉強面で苦労することはなかった。高校卒業後の進路については、母親に料理をほめられたことがきっかけで、調理に関することをしたいと考えていた。高校の家庭科教師が「栄養士、結構大変だけど、すごいやりがいがあるよ」と言っていたことをきっかけに、栄養士に



関心をもった。その後、自身でインターネットを用いて栄養士の仕事を調べ、母親に相談した。母親は、三島さんが進学することは期待しておらず、「私はほんとに就職をお願いしていたんですけども、本人の中ではもうちょっと勉強したいっていうことだったので、本人が行きたいというものを駄目とも言えないしと思って行かせたんですけどね」と語っていた。入学一時金は母親が「どっから借金してきて用意」し、学費は市の貸付金を利用した。母親は良い進学支援制度がないか市役所でたずねたが、あまり相談に乗ってもらえなかったという。

卒業後は栄養士の専門学校に進学したが、人間関係上での困難を経験したことをきっかけに実習がつかなくなってしまい、退学した。

#### 4-4. 金森義孝さんのケース

金森さんは、父(70代)、母(年齢不明)、姉(年齢不明)、妹(年齢不明)と5人で暮らしていた。父親は外国生まれの日本人で日本語をほとんど話すことができないため、子どもたちとのコミュニケーションがうまくいかずに悩んでいた。母親は外国人であり、父親と同様、日本語を話せなかった。ケースワーカーとのやり取りは、金森さんや姉が行うこともあった。

父親は、金森さんが四年制大学に進学することを強く望んでいた。中学時代に、父親は金森さんを塾に入れたが、本人は授業内容をあまり理解することができずに辞めた。その後勉強会に通うこととなったが、勉強会の内容はよく理解でき、勉強以外のイベントにも積極的に参加して、色々な人と話せたことがよかったという。高校進学時は公立全日制高校普通科を受験したが、不合格となり自宅付近の私立全日制高校普通科に進学した。

高校進学後は、勉強が面倒になり、身が入らなくなった。高校でも塾の体験入学をしたが学費が高く、本人も「これを毎回やっていると疲れる」「自分に合わない」と感じていたので続けることはできなかった。進学先は大学付属の高校であり、多くの生徒が系列大学に進学していた。そのため、受験シーズンになっても緊張感のある雰囲気は生まれなかった。金森さんも四年制大学進学をイメージしていたが、系列大学には全く魅力を感じなかった。その理由は、「(大学を卒業した)その後何をするのかわからないのを具体的に決めて、大学の4年間が無駄になるっていうのを聞いて。やっぱり大学の環境が、施設とかじゃなくて、

人間の周りの環境が悪ければ、大学の4年間無駄にしようだった」というものだった。

インタビュー時は高校卒業直前だったが、進路は決まっていなかった。大学進学に伴う学費については、父親と親戚が口論するのを目にしたことがあった。親戚が大学進学について「授業料とか400万するんなら行かなくていい」と言ったことに対して、父親は費用については問題ないと話していたという。しかし、実際に父親は費用を工面できてはいなかった。そして、本人としては奨学金を借りたとしても卒業後に何百万ものお金を返せる自信もなく、利用する気はないという。卒業後は当面アルバイトをして将来のことを考えたいと思っていたが、ケースワーカーからは正社員就職をするよう言われていた。ケースワーカーは、進学か正社員就職か早急に決めるよう金森さんに迫っていたが、周りに相談できる人もおらずに困っていた。学校の教師に少し話したこともあったが、その対応については「返しがあんまり微妙、微妙っていったらおかしいんですけど、いまいち」と感じるものだった。親しい友人や妹に話したが、問題が難しすぎると言われ、なかなか解決策が見つからない状態だった。

#### 4-5. 分析

全日制高校普通科に進学した者たちは、勉強会の効果もあって、金森さん以外が中学以前よりも学校内で相対的に良い成績が取れていたと語っていた。

学校内で成績が良かった田口さんや前野さんは、教師から四年制大学への進学を勧められていた<sup>1)</sup>。しかし、学費のことはもちろん、生活費のことを考えると生活保護世帯の若者たちが四年間学校に通うことは非常にハードルが高い。そのため、進学する者であっても短大や専門学校という教育期間が比較的短い学校に進学していたと考えられる。金森さんの場合、大学付属校という状況や親の教育期待もあって進学先として四年制大学が前提とされており、四年制大学よりも相対的に費用負担が抑えられるような短大・専門学校・職業訓練校などは視野に入っていなかったようだった。そして、ケースワーカーに正社員就職を迫られても、大学付属校であるため専門学科のような学校経由の就職に向けた指導を受けることは難しく、そもそも教師たちが金森さんの事情を理解することが難しかったと言える。

また、専門学校進学者については、教師たちが進学先の決定などに強く関与をした様子は見られなかった。

前野さんについては、母親の協力のもとに専門学校進学を具体化させていき、三島さんの場合は専門学校に進学するきっかけは家庭科の教師のアドバイスだったが、その後栄養士の仕事内容については一人でインターネットを使って調べていた。三浦(2019)が専門学校進学者の別のケース(五十嵐さん、松崎さん)についても示しているが、専門学校に進学する者たちは教師を通してではなく、自分で情報収集をしていた。専門学校進学は全日制高校普通科の教師にとって周辺的な位置づけとなっており、それゆえ専門学校進学者たちは進学に必要な情報を自ら収集していた可能性がある。

では、本人たちにとってどのような進路形成が望まれていたのだろうか。田口さんは社会福祉を学ぼうとしていたが、途中で保育に関心を持ったことから短大進学に変更した。前野さんには、ファッション関連のことを学びたいという志望が先にあり、それを学ぶために短大が専門学校のどちらにするか迷っていた。三島さんは栄養士の資格を取るべく専門学校進学を決めた。このように、短大や専門学校に進学した者たちについては、具体的に「やりたいこと」を決定したうえで、進学の計画が立てられていた。金森さんは実際に進学しなかったが、「やりたいこと」を決めてから進学の計画が立てられるべきと捉えていた。彼ら彼女らは四年制大学進学が見込めない状況にあり、また経済的に苦しい中で進学費用を捻出するからには確実に将来に結びつく学びをしたいという切実な願いがあったのではないだろうか。そうした進学観と、大学付属校における四年制大学進学のあり方とは相いれないものであり、金森さんは悩んでいたとも考えられる。

進学への期待について、田口さんの母親や三島さんの母親は、子どもたちの高卒後の進学を望んでいるわけではなかったが、進学費用の準備をすることができた。一方で、金森さんの父親は子どもが四年制大学へ進学することを強く望んでいたにもかかわらず、かなうことはなかった。金森さんの父親は親戚から子どもの大学進学に反対されていたので、親戚に金銭面で頼ることは難しいと思われる。そして、日本語がほとんど話せないため、支援制度を調べることは難しく、仮に進学支援にかんする情報提供を受けたとしても、父親が何らかの手続きをすることは困難であろう。このことから、親が子どもの進学を望むかどうかよりも、入学一時金が借りられるような人的資本があるか、または進学支援に関する制度を調べ、事務手続きを手伝えるような文化的背景があるかが子どもの進路に影響を与えていると言えるのではないだろうか。前野さん

の母親は30代と比較的若く、インターネットも利用して幅広い情報を収集・検討することが可能だったが、調査協力者の中には高齢の親もいた<sup>2</sup>。

## 5. 定時制・通信制高校普通科の者たち

定時制高校に進学した者たちについては、全体で7名、通信制高校に進学した者は全体で2名だった。定時制・通信制高校に進学した者の中で、高校3年以上は倉田藍さん(インタビュー時高校留年中)、杉本彩香さん(インタビュー時高校留年中)、佐々木裕樹さん(インタビュー時短大1年)の3名だった。

### 5-1. 倉田藍さんのケース

倉田さんの母親は外国人であり、倉田さんが生まれる前に来日した。両親の離婚をきっかけに生活保護を受給するようになり、倉田さん・母親(年齢不明)・妹(1歳下)の3人暮らしとなった。母親はほとんど日本語を話すことができない。近所にいる母親の友人に、ケースワーカーの通訳を頼むことがあるが、倉田さんが対応することもあった。母親は母国の大学を中退しており、娘たちには可能であれば四年制大学まで進んでほしいと考えていた。母親自身は経済的な支援ができないものの、娘たちが自分自身で奨学金を借りたら進学は可能ではないかと考えていた。

倉田さんは小学校時代、「どちらかといえば成績いい方」だったが、中学でいじめを受けたことがきっかけで授業に集中できなくなり、成績が下がった。高校進学の際、1歳上の先輩から誘われたことがきっかけで、公立定時制高校普通科(単位制)のF高校への進学を考え始めた。学校のパンフレットを読んで、「自分を変えたいとかそういう、子たちのための学校」という説明を見たときに、強く魅力を感じた。

高校生活については、入学前に期待していた通りで、「*自分的にはやりやすい学校*」と感じていた。倉田さんの学校は単位制をとっており、通常は4年で卒業だが、単位の取り方によっては3年で卒業できる。仲の良い友人の一人は、単位を早めにとって3年で卒業していた。

倉田さんは「*基本的に自分の得意科目しか選ばない*」という方針で授業を選択していた。特に、得意教科である社会・国語・英語の授業を中心に選んでいた。学校は楽しかったが、同じ学年の友人たちと遊びに行つて授業を休みがちであったことに加えて、体調を崩

して入院したために、4年目時点で卒業に必要な単位が24単位足りなくなった。

生活保護の制度上、高校に通うための交通費は支給されていたが、留年をするると支給されなくなる。そのため、アルバイトをして交通費を工面することが必要だった。倉田さんは「それ(交通費のこと)が今一番つらくて、自分がやったことなんで、自分で、自業自得なんですけど」と語っていた。高校を卒業したいという気持ちはあり、「せっかく自分が4年間頑張っている学校なんで、辞めちゃったらもったいないなっていうのがあって、その1年間で長くても頑張ろうかなって思っ」て」と意思を固めていた。倉田さんの担任も事情を把握しており、その事情については来年度の担任に申し送りをしているようだった。

高校卒業後は、美容専門学校や歌にかんする専門学校、語学を学べる大学のAO入試についても興味があるという。倉田さんは進学についてはいつでも考えられるので、今しているアルバイト先で就職するのも良いかもしれないとも語っていた。

## 5-2. 杉本彩香さんのケース

杉本さんは小・中学校と人間関係での困難を経験したことをきっかけに、不登校気味であった。高校では知らない人しかいない環境に行きたいという思いから、公立通信制高校普通科のG高校への進学を決めた。

G高校には週4回の登校日がもうけられており、入学当初は比較的全日制の高校生に近い学校生活だった。保育や福祉など、興味がある科目はすぐに合格できた。レポートは自宅に持って帰ってやりたくなかったので、学校の図書室や学習スペースで取り組むことがほとんどだった。しかし、自宅が遠く学校に通いにくいことから、次第に学校に通う回数は減っていった。また、学校で教師に質問しようとしても慌ただしく次の授業に移動するのを見ると話しかけられず、友人に聞こうとしても、取っている授業がそれぞれ異なるので聞けなかった。レポートが出せないために単位を取ることができない状態が続き、修業年限の4年で卒業できないことが決定した。修業年限を超えると、生活保護の制度上、通学のための交通費が支給されなくなるため、学校に行く回数は減らし、アルバイトを増やしていた。

インタビュー時、杉本さんは高校5年目となっており、交通費のことを考えて、学校に行く回数を最低限に減らし、とにかくアルバイトを頑張ることにしていた。長く在学している杉本さんのことを心配した担任

は、彼女が学校に来たときにいつも近況の確認をしていた。杉本さん自身は高校を卒業したい気持ちがあり、「(高卒資格は)もうどうしても取りたい」「学費費やしてるんだから、教科書なり何なり」「ここまでずるずる来させちゃったのは自分の責任」と語っていた。

高校卒業後の見通しについて杉本さんは当初、子ども関係に興味があり、高校卒業後は進学をして保育の仕事をするを考えていた。担任から働きながら通える学校を紹介されたこともあったが、杉本さん自身は学業と仕事を両立させる自信が持てず乗り気ではなかったという。さらに、母親は離婚前から体調不良を抱えていたが、長引く体調不良によって精神的な不調にもなっていた。杉本さん自身の直近の将来展望として、「現実的に考えるととりあえず、学校卒業して、一人暮らしをしたい」ということが語られていた。

将来住むところや、奨学金などの制度に関することをたずねたときには、「もうちょいそれが現実近くに近づいてきたら考えるのかなって思うんで、あんまり今は思わない」と話していた。

## 5-3. 佐々木裕樹さんのケース

佐々木さんは、母親(40代)と2人暮らしである。母親は、きょうだいが多く経済的に苦しい経験をしており、自分と同じような苦勞を子どもには絶対にさせたくないと考えていた。佐々木さんは小さいころから発達障害的な傾向が見られていたが、父親とその家族は本人の問題行動を母親の養育上の問題であると決めつけ、母親を責めた。その後、離婚に至っていた。

佐々木さんは、小学生のときに広範性発達障害であると診断された。ただし、発達障害に関連するような問題行動について、20歳になった佐々木さんにとっては母親に大変な迷惑をかけてしまった出来事で、今は思い出したくないことであるとして詳細は話したくない様子だった。

母親は、佐々木さんに何か成功体験をつくってほしいと願って、経済的にはかなり無理をして私立通信制高校(サポート校つき)に推薦入試で入学させた。その高校は発達障害にかなり理解があるところで、母親は佐々木さんがみるみる変わっていく、会話がうまくできるようになったことが嬉しかったという。

佐々木さんは中学のときに勉強会に行ってから、勉強がわかるようになっていったのが楽しかったという。高校の勉強は、中学よりも「授業がすごく楽」と感じており、クラスの中でも成績は良いほうだった。勉強



が楽になったので、高校時代は友人の家やカラオケなど、遊びに行くことが生活の中心になっていた。2年から学科ごとにコース分けがされ、四年制大学に進学することを意識しはじめたが、これ以上親に迷惑をかけることができないと思い進学の話を自分から言い出すことはできなかった。母親、担任と一緒に経済的事情もふまえて進路について話したところ、技術系のH短大を担任から提案された。佐々木さんは「短大だと資格取れるし、お金稼げたほうが親、安心するかな」と考えて短大への進学を決めた。

短大入学後は、時間割の空きがなく、課題も多かった。学校の勉強が忙しいため、アルバイトをすることは難しかった。母親は一日一食ですませ（本人には三食食べさせているという）、ベランダで野菜の栽培をして食費を切り詰めていた。

短大卒業後については、学校に技術系の求人が豊富にきており、就職には困らないという。母親はできるだけ大手の企業に就職することを望んでいるが、本人は多くの人と関わることが苦手であるため、小規模な企業への就職を望んでいた。

#### 5-4. 分析

定時制・通信制高校に進学した者の中でも、倉田さんと杉本さんはそもそも高校卒業が危ぶまれる状態にあった。彼女たちは自身の状況について「自業自得」や「自分の責任」と話していたが、卒業できなかった背景には、単位制・通信制といった学校のあり方が影響していると考えられる。倉田さんは単位制の定時制高校に通っており、幅広い選択科目から自分で時間割をつくることのできるような学習形態だった。こういった学習形態は、入学当初に得意な科目で学んでいるときは「やりやすい」と感じられたかもしれない。しかし、学習が進むにつれて残った苦手科目にも取り組まなければならない中で、次第に学業から遠ざかっていった可能性がある。杉本さんもおそらく同様の状況を経験していると考えられ、分からない部分を誰かに質問しようとしていたが、教師が慌ただしく質問しにくい雰囲気、友人に聞こうとしてもそれぞれ別の授業を取っているので授業でわからないことは聞けない状況だった。

修業年数を超過した分の学費にかんして語られなかったが<sup>3)</sup>、本人たちにとっては、学校に通うための交通費のことが一番の心配ごととして語られていた。生活保護の制度上、通学のための交通費が支給されるが、

留年すると支給されなくなる。高校卒業の見通しが立たない中で、彼女たちの当面の目標は卒業することとなっており、進路について本格的に考える余裕はなかったが、高卒資格だけは取りたいと考えていた。厳しい状況に置かれた彼女たちに対して、教師たちは学校生活の継続を積極的に支えようとしていた。佐々木さんはサポート校がある私立通信制高校に通っており、学業面については中学以前よりも簡単に感じており、留年もしていなかった。サポート校がある私立通信制高校は、通信制といえども生徒の事情に合わせて通学日数が選択できる制度や、趣味に応じた活動を中心とするようなコースをもつことで就学を支援している<sup>4)</sup>。佐々木さんの学校では、杉本さんが通っていた公立通信制高校よりも、柔軟なカリキュラムや学びやすい環境があったと考えられるが、学費負担は重かったようである。

保護者たちの関わりとしては、杉本さんについては母親が心身ともに調子を崩しており、高校卒業後の進路について何らかの援助を得ることは期待できそうもなかった。倉田さんの母親は四年制大学への進学を望んでいたが、経済的な支援が難しかったため子ども自身に負担する形で進学することを期待していた。しかし、倉田さんの母親は金森さんの父親と同様に日本語を話すことができず、日本の高等教育の負担の大きさについてイメージができなかったのではないかと考えられる。このように、杉本さんも倉田さんも保護者から実質的な支えを得ることはできていなかった。一方、佐々木さんの母親は自分と同じ苦勞をさせまいと、自分を犠牲にしても子どもの進学を支えていた。佐々木さん自身も親が自分のために苦勞をして環境を整えてくれていることに気を遣っており、それゆえ自分の意志や希望は言い出しにくい状態となっていた。

定時制・通信制に進学した者たちの中には、単位制・通信制の仕組みの中で単位が取れずに高校卒業が危ぶまれる者たちがいた。教師たちからのサポートは得られていたが、親たちの状況として学業継続についても、進路についても何らかの援助は期待できそうもなかった。厳しい状況に置かれる中で、彼女たちは当面の展望として、交通費をアルバイトで捻出しながら残りの単位を取り、高校を卒業したいと望んでいた。

#### 6. まとめ

以上、学校タイプ別に分けながら、学校生活・進路要求・保護者の期待および働きかけを含んだライフス

トリーの分析を行ってきた。まず、学校生活・進路要求・保護者の期待および働きかけがいかなるものであったのかについて学校タイプごとに比較をしながら検討していきたい。

まず、調査協力者たちは基本的に進学を志望しており、一貫して就職志望だったのは全日制高校専門学科に進学した高井さんのみであった。杉田は、高卒女性の身近にあるような正社員の働き方は将来展望を切り拓くものとなっておらず、彼女たちが置かれた状況に即して「やりがい」のある仕事を目指す上で進学が望まれていたと論じている(杉田 2015)。高井さんについては、工業科で仕事と結びつくスキルが得られ、長期的に働きつづける展望が持てるような求人があったために、一貫して就職志望であったと考えられるが、加納さんについては商業系学科ではあったが安定した仕事が学校経由の就職では見込めず、それゆえ公務員が展望されていたと考えられる。

進学を望む者たちは、経済的自立が早期に迫られている中で、できるだけ短期間で、かつ仕事と明確に結びつくような学びを切実に求めていた。それゆえ、進学者の多くは専門学校への進学を志望していたが、全日制高校普通科に在籍していた者たちの多くは、学校で四年制大学中心の進路指導を経験しており、専門学校志望者は自分自身で進学に必要な情報収集を行っていた。彼ら彼女らの状況に即した進学支援のあり方が求められるが、進学することを一概に「成功」と捉えることにも注意しなければならない。生活保護世帯から高卒後に進学をした者たちが、経済的な困難を経験してきたことから培った経済観念ゆえに、学内の人間関係にコミットすることができず、学校生活の継続が困難となっていることも明らかとなっている(林 2020)。今回のケースでも三島さんが専門学校を中退しているが、進学後の状況についても今後見ていく必要があるだろう。

単位制や通信制の高校に進学した者たちは、単位が取れずに留年することもあった。本人たちは修業年限を超えてしまったことを自らの責任と語っていたが、単位制高校においては学校生活上のさまざまなことからの責任は個々人に課せられることを生徒たちが身をもって経験していることも指摘されている(遠藤 2004)。もちろん、自分のペースで学べる形態があったからこそ、中学以前の学校生活で困難を経験した彼女たちの就学継続が可能になっていたことはあるし、教師たちが彼女たちを気にかけて個別的な対応をとっていたことも支えとなっていたに違いない。しかし、

中学以前の学校生活で困難を抱えてきた者たちが友人同士で支え合う関係性から切り離され、学校卒業や仕事への移行のタイミングを自分で引き受けることは、周囲の支えを得られにくくし、より社会的な不利をもたらす可能性もあるのではないだろうか。

教育期待は保護者によって多様であったが、保護者の働きかけとしては、おおむね子どもの志望する進路を実現するために協力する姿勢が見られた。ただし、本調査に協力可能な層の傾向である可能性もあるため、全体の傾向については量的な調査によって裏付けられる必要があるだろう。保護者たちは子どもの進学に際して、親戚からお金を借りたり制度を調べたりするという形で協力していた。一方で、調査対象者の保護者たちの中には外国人である者、高齢である者、社会的に孤立している者、インターネットが使えない者もあり、必ずしも親戚の協力を得ることや、情報収集を行うことはできないと思われる。

本論文で学校タイプ別に分析したところ、進学をあきらめて正社員就職をする者、保護者の助けを得て短大や専門学校など、より費用が安い学校に進学を決めた者、進学がかなわず進路未定となった者、卒業が危ぶまれる者たちの状況が確認できた。今回のケースは多くが学校や保護者から何らかの支援が得られていたが、調査協力者たちの中には高校に進学しない／できない者たちもあり、保護者からも学校からも援助が期待できない者たちもいた。今後の課題として、高校に進学しない／できない者たちがどのような状況に置かれているのかを見ていく必要があるだろう。

## 注

1 三島さんも学校内で成績は良かった様子だったが、学内での大学進学者は少なく、教師から四年制大学を勧められることはなかった。この背景には、三島さんが通っていた高校がチャレンジスクールであり、全日制普通科高校であっても他の3名とは異なる高校タイプであったことが影響していると考えられる。

2 60代である加納さんの母親は、入院をしたため中3の三者面談に参加できず、担任から高校受験の情報を得ることができなかった。その後自分で情報収集しようとしたが、手段としてインターネットは使えなかったと話していた。

3 X市がある県では、修業年限を超過したなどの事情で就学支援金の対象とならない生徒に対して、授業料を減免する制度がある。生活保護世帯の生徒は、全額免除対象である。おそらくケースワーカーや学校の教師などを経由してこの情報を知っていたため、本人たちは学費を心配していなかったと考えられる。

4 酒井朗(2017)「高校における中退・転学・不登校・実態の不透明さと支援の市場化」末富芳編著『子どもの貧困対策と教育支援—より良い政策・連携・協働のために—』212-213 頁。酒井は、私立通信制高校が高校修了を支援する意義がある一方で、学費負担が高額であることを論じている。

学校・労働・家族—』明石書店。

首都大学東京子ども若者・貧困研究センター(2018)

『相模原市若者すだち支援事業(生活保護世帯中学生学習支援事業)フォローアップ調査報告書』。

植上一希(2011)『専門学校の教育とキャリア形成—進学・学び・卒業後—』大月書店。

## ○参考・引用文献

阿部彩(2008)『子どもの貧困—日本の不公平を考える—』岩波新書。

遠藤宏美(2004)「学年制を崩すシステムと共生への試み」古賀正義編著『学校のエスノグラフィ—事例研究から見た高校教育の内側—』嵯峨野書院。

林明子(2016)『生活保護世帯の子どものライフストーリー—貧困の世代的再生産—』勁草書房。

林明子(2020)「生活保護世帯の子どもの高卒後の進学をめぐる困難」杉田真衣／谷口由希子編著 松本伊智朗編集代表『大人になる・社会をつくる—若者の貧困と学校・労働・家族—』明石書店。

乾彰夫編、東京都立大学「高卒者の進路動向に関する調査」グループ著(2006)『18歳の今を生きぬく—高卒1年目の選択—』青木書店。

三浦芳恵(2019)「生活保護世帯の若者たちの高校進学経験」『生活指導研究』NO36、75-85 頁。

盛満弥生(2014)「A 団地の家族の子育て方針・実態」長谷川裕編著『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難—低所得者集住地域の実態調査から—』旬報社。

酒井朗(2017)「高校における中退・転学・不登校—実態の不透明さと支援の市場化—」末富芳編著『子どもの貧困対策と教育支援—より良い政策・連携・協働のために—』明石書店。

桜井啓太(2018)「生活保護世帯の子どもの大学等進学を考える—堺市実態調査から—」『賃金と社会保障』No.1697・98、36-44 頁。

白川優治(2017)「貧困からの大学進学と給付型奨学金の制度的課題」末富芳編著『子どもの貧困対策と教育支援—より良い政策・連携・協働のために—』明石書店。

杉田真衣(2015)『高卒女性の12年—不安定な労働、ゆるやかなつながり—』大月書店。

杉田真衣(2020)「子どもの貧困と<学校から仕事へ>の移行」杉田真衣／谷口由希子編著 松本伊智朗編集代表『大人になる・社会をつくる—若者の貧困と